

氏名	張 照旭
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 5062 号
学位授与の日付	平成 26 年 9 月 30 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	明治期中国語教科書における中国語カナ表記についての研究
学位論文審査委員	主査・教授 江口 泰生 教授(特任) 辻 星児 准教授 京 健治 教授 山本 秀樹

学位論文内容の要旨

張照旭氏の学位請求論文『明治期中国語教科書における中国語カナ表記についての研究』はA4版で160頁からなる(40字×36行×160頁)。

序論、本論、結論の三部構成で、序論は2014年11月「唐船貿易における唐船の出航地と唐船乗組員の出身地について—明治初期中国語教育の背景—」(『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第38号、2014年11月)をベースにして、先行研究や目的や方法、先行研究の問題点を述べる。

本論は2つの活字論文を中心に構成される。「『大清文典』の中国語カナ表記について」(『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第37号、2014年3月)に活字化したものを第1章へ、「伊沢修二『日清字音鑑』におけるng韻尾の表記方法について」(『岡大國文論稿』第41号、2013年3月)を本論2章にすえる。

論文の章立ては以下のとおり。

序 論

1. 本論文の目的
2. 先行研究とその問題点
3. 本論文の研究手法と調査資料
4. 本論文の背景
5. 『大清文典』を取り上げた理由
6. 『日清字音鑑』を取り上げた理由

本 論

第1章

『大清文典』の中国語カナ表記について

1. 『大清文典』について
2. 近世訳官系唐音資料の種類
3. 『大清文典』と近世訳官系唐音資料との比較
4. 終わりに

第2章

『日清字音鑑』における ng 韻尾の表記方法について

1. 『日清字音鑑』について
2. 『日清字音鑑』における鼻音韻尾の表記
3. 記号「クゝ」の意味
4. 「クゝ」で ng 韻尾を表記する理由
5. 終わりに

結 論

1. 本論文の纏め
2. 先行研究との違い
3. 本論文の学史的な位置づけと今後の課題

参考文献

論文の要旨は以下のとおりである。

明治期には日本人が中国語を習得するための中国語関係書籍が数多く出版された。本論文ではこれらの中国語教科書を一括して「明治期中国語教科書」と称し、明治期の中国語教科書はどのようなものであるか、どのように位置づけられるかについて検討したものである。

まず序論では先行研究をあげ、先行研究の問題点、研究方法について述べた。明治期中国語教科書にはカナ表記で中国語の発音を表すものがある。このカナ表記を「中国語カナ表記」と称してこれに着目し、特に『大清文典』と『日清字音鑑』という2点の中国語教科書を取りあげ分析した。

従来、六角恒広は明治期中国語教科書の書目や発行点数の傾向性を指摘したり（『中国語関係書書目』（増補版）や『中国語関係書書目』）、近代中国語教科書を245点復刻刊行して研究資料を提供した（同『中国語教本類集成』）。六角恒広『中国語教育史の研究』（東方書店）や安藤彦太郎『中国語と近代日本』（岩波書店）は明治期中国語教育を検討した。

六角恒広や安藤彦太郎は教科書の成立経緯・内容の概要・後世の教科書への影響などを指摘しているが、それは歴史的な観点からの調査が主であった。その結果、明治初期の中国語教科書では「南京官話」を中心としたものが教育されているというのがこれまでの説であった。

しかし序論において江戸時代の唐船貿易の出港地に注目し、出港地は呉語方言の範囲にあるのではないかということ江戸時代の史料『華夷変態』をもちいて数値化した。

また唐船乗組員の出身地について、以下の資料を網羅的に調査した。『文政九年遠州漂着得泰船資料—江戸時代漂着唐船資料集二—』、『寛政元年土佐漂着安利船資料—江戸時代漂着唐船資料集三—』、『安永九年安房千倉漂着南京船元順号資料—江戸時代漂着唐船資料集五—』、『寛政十二年遠州漂着唐船萬勝號資料—江戸時代漂着唐船資料集六—』、『文化十二年豆州漂着南京永茂船資料—江戸時代漂着唐船資料集九—』（以上、関西大学東西学術研究所）等の資料を調べ、「船主」・「副船主」・「財副」など貿易に関する重要職は殆ど呉語区出身の人であることを明らかにした。

出港地や乗組員が呉方言の範囲に収まることから推定してみると、先行説である「南京官話」説がはたして成り立つのかという疑問を提示した。先行研究への疑問提示が具体的な資料によって行われている。

本論文は上述の問題点について、語学的な観点から分析しようとするものであることが

序論で述べられた。

序論を受けて、本論第1章で『大清文典』がどの地方の中国語音系に基づいているかを調査した。紀要論文「『大清文典』の中国語カナ表記について」(『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第37号、2014年3月)を元としている。『大清文典』の中国語カナ表記を4種類11本もの近世訳官系唐音資料と比較した。

その結果、「全濁声母」・「止摂開口舌・歯音(破擦音に限って)」・「薬韻」などにおいて、『大清文典』は近世訳官系唐音資料の杭州音系統に一致していると結論した。

先行研究では、歴史学的立場から「南京官話」に依拠しているとされてきたが、本論文の語学的な検討の結果、杭州音に一致することが明らかとなった。

『大清文典』にカナ表記をつけた颯川重寛は長崎唐通事の出身者であった。漢語学所の督長兼教導であり、東京外国語学校漢語学一等教諭、明治初期中国語教育の中心的な教師であったが、その教育の基盤は近世訳官系唐音資料の杭州音系統に依拠していることが明らかになった。

本論第2章は前述のとおり「伊沢修二『日清字音鑑』におけるng韻尾の表記方法について」(『岡大國文論稿』第41号、2013年3月)を元にして構成されている。

伊沢修二は明治・大正期の日本の教育者、教育学者で近代日本の音楽教育、吃音矯正の第一人者である。彼が著した『日清字音鑑』におけるng韻尾の表記方法について検討した。特に『日清字音鑑』が記号「クゝ」でng韻尾を表していることに注目した。

この表記については実藤恵秀「支那語書誌学(4)一日清字音鑑一」(1943、『支那語雑誌』3-9所収、蜚雪書院)は「苦心發明」、村上嘉英「日本人の台湾における閩南語研究」(1966、『日本文化』45所収、天理大学)は「新造符号」と指摘している。小川尚義「仮名遣ニ関スル調」(1900、『国語研究会報』1所収、台湾日日新報社)は「新假字」と指摘している。これらの先行研究によると、伊沢修二の中国語発音表記法は明治期中国語教育において近代的・科学的・独創的なものであるとされている。

しかし本論文では、幕末から成立した鼻濁音表記に由来し、明治10年(1877)刊行された大槻文彦『支那文典』が「ング」をもちいてng韻尾を表記、84種類の明治期中国語教科書における鼻音韻尾についての記述を調べてみると、中国語のng韻尾を「グ」に近い表記で表すという発想は広い範囲に分布していたことを明らかにした。

「クゝ」という記号の由来、「グ」に近い表記でng韻尾を表そうとする発想は『日清字音鑑』の独創ではなく、江戸中期からの一連の発想の中に位置づけられるべきではないかと結論づけた。

結論では以上述べたことを要約した。

学位論文審査結果の要旨

審査会は平成26年7月18日(金曜)18時より2-6セミナー室で開催した。

審査には委員長に日本語史の江口泰生、言語学の辻教授(特任)、日本語史の京健治准教授、近世文学の山本秀樹教授があたった。予備論文審査では近代文学の西山康一准教授が審査員であったが、審査会開催時サバティカル期間中にあたっており、当時の制度ではサバティカル期間内には学位審査にあたることができないので、山本秀樹教授に交替してもらう旨、審査委員会設置の際に認められたものである。

まず履歴書を確認した。次に学位請求論文と既発表論文との関係を学位請求者張照旭氏から説明してもらった。

序論が2014年11月「唐船貿易における唐船の出航地と唐船乗組員の出身地について—明治初期中国語教育の背景—」（『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第38号、2014年11月）、本論第1章が「『大清文典』の中国語カナ表記について」（『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第37号、2014年3月）、本論第2章が「伊沢修二『日清字音鑑』におけるng韻尾の表記方法について」（『岡大國文論稿』第41号、2013年3月）を元にして構成されていることが確認された。

つぎに本論文の概要について、説明をしてもらった。その際、予備論文からの変更点についても説明があった。予備論文では序論や活字化した論文を5章に羅列しただけであったが、序論、本論、結論の3部仕立てとし、内容も取捨選択して纏まりを持つように工夫したという説明があった。

その後、質疑応答にはいった。

本論文の調査によって、序論と本論第1章とあわせると、江戸時代に行われた呉地方との貿易の関係で、長崎通事は呉語を中心とした学習が行われ、それが明治時代にも引き継がれたのではないかと、という道筋が考えられるようになったのは本論文の一つの成果であろう。

また新しさが強調されがちな明治期において、江戸時代の伝統を受け継いでいることをng韻尾の表記という具体的な面で指摘した点も重要である。従来、歴史学の面から考察されることが多かった明治期中国語教科書について、日本語史日本語学の観点から分析し、研究の方法に新たな地平を切り拓いたことも大きな業績である。今後、このような方向からの研究が行われると思われる。

申請者は非常に努力しており、その懸命な努力のあとがうかがえる。その点も非常に高く評価された。たとえば日本韻学史の調査のために日本の各地に残されている版本を現地調査したり、マイクロフィルムでみたり、具体的に実物から検討の対象としていることは高く評価された。実証的な研究態度や明治期の中国語教科書に着目するという発想は、全国レベルでの学会発表でも高く評価されている。

『大清文典』の中国語カナ表記の一つ一つについて、中古音の所属韻を調査・分類し、整理して表としてまとめあげるといふ、大変に煩雑な作業を地道に行っている。そしてそれを4種類11本の近世訳官系唐音資料と比較することなど、大変な労力であったと推察される。

また84種類の明治期中国語教科書におけるn韻尾、ng韻尾を徹底調査するなど努力の賜物である。懸命に努力して、実証を貫いた点も高く評価された。

先行研究をよく把握し、咀嚼し、それらの問題点を明らかにし、明治期の中国語教科書にある江戸時代の伝統を依拠した中国語の音系や表記法などを、具体的に浮かび上がらせたことも大変に興味深い。先行研究の「南京官話」説に対抗するだけの証拠は揃えたといえよう。

一方で次のような問題点も指摘された。

日本語文章や表現に尽くされていない部分が散見されたのは残念であった。論文の主旨には影響しないかもしれないが、整然とした日本語で表現することが主張の説得力を増すということもある。

序論について、通訳は長崎唐通事ひとりが行うものではなく、中国側にも1名、日本側からも1名の通訳が随伴するというのが普通かもしれないので、中国船乗組員が呉語を用いるから、日本側の通訳が呉語を用いなければならないということにはならないかもしれないという指摘もあった。本論第1章の結論について、杭州音と一致するという部分はたしかにあるのだが、不一致のものをどのように処理するかという点も万全とは言い難い点

もあった。

もっとも大きな問題点は、新しさという観点から中国語教科書を分析する必要が残されている点である。明治期の中国語教科書には、江戸時代の伝統を引き継ぐ部分と、ウェード式や視話法、北方方言を基盤とする教科書への推移など、新しい潮流を反映するものがある。本論文はそのうちの、これまで指摘のなかった江戸時代の伝統を引き継ぐ部分を明らかにしたものであるが、明治以降の新しい面からの中国語教科書分析に及んでいない点は主張の一方のみを強調したことになり、研究としてはバランスがとれていない点は非常に惜まれる。このことは本論文で取り上げたものが2点だったこととも関係しており、他の資料についても調査を経たうえで、全体をバランスよく位置付け、俯瞰的に記述することが望まれる。

上述のような問題点はあるものの、これらは今後の課題と言っても良い。申請者は非常によく努力しており、中国語の音韻学のみならず、日本語の漢字音研究史にも深い知識を蓄積していることがよくわかる。データの分析は徹底しており、近世の版本や写本を見たりするなど、留学生でありながら、良くここまでやり通したという深い感動もあった。

以上のような審査を経て、全員一致で学位論文として合格と判定した。